

淀川下流域におけるチャネルキャットフィッシュの食性

○吉田誠^{1,2*}・宮脇勇伍²

[1: 国立環境研究所琵琶湖分室, 2: チャネルキャットフィッシュ行動研究グループ]

*連絡先: makoto.a.yoshida[at]gmail.com

琵琶湖・淀川水系では 2001 年以降、特定外来生物チャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus* の侵入が確認され、2022 年現在では滋賀県内の瀬田川洗堰周辺から大阪府内の淀川下流までの広い範囲で多数の個体が捕獲されている。本種は雑食性で、在来魚との餌資源をめぐる競合や他の水生生物に対する直接の捕食等、在来生態系への直接・間接的な悪影響が懸念されるが、国内の河川における本種の食性に関する知見は乏しい。そこで本研究では淀川下流域における本種の食性把握を目的として、遊漁者からの聞き取り調査および遊漁者による提供サンプルの消化管内容物調査をおこなった。

2019 年 1 月から 2020 年 12 月にかけて 12 名の遊漁者からチャネルキャットフィッシュ 194 個体分の捕獲情報を収集し、使用した釣り餌、釣り仕掛けおよび魚の針がかりした深度帯（表層か底層か）について聞き取った。このうち 2020 年 5-11 月に捕獲された 51 個体（全長 25-70cm）については捕獲直後に現場で解剖し、消化管内容物に含まれる動植物の種類と数をその場で記録した。消化管内容物に関するデータは解剖個体の捕獲月および体長階級別に集計し、季節の推移および個体の成長に伴う本種の食性の変化について検討した。

本種の捕獲時に使われた釣り餌は、ミミズ（168 個体）、魚の切身（11 個体）、ザリガニ（6 個体）、魚型の疑似餌（4 個体）、サツマイモ（1 個体）およびその他（4 個体）だった。このうち、魚型の疑似餌（ルアー）で捕獲された 2 個体は表層で釣られた一方、他の 192 個体は底層の仕掛けで釣られていた。解剖した 51 個体のうち 48 個体から消化管内容物が見つかり、そこに含まれる動植物の出現頻度（48 個体中の割合；%F）は、巻貝類（65%）、陸生昆虫（33%）、魚類（31%）、穀物（24%）、ハリガネムシ類（22%）、甲殻類（20%）、陸生植物（14%）、藻類（12%）、水生昆虫（6%）だった。陸生昆虫は 5-11 月を通じて出現し、巻貝類は 5-9 月に、魚類は 10-11 月に多い傾向がみられた。全長 50cm 未満の個体からは巻貝類と陸生昆虫が、それ以上の個体では魚類と甲殻類が多く出現した。以上の結果から、本種は河川の表層から底層まで幅広い深度帯において採餌し、水中・陸上由来のさまざまな動植物を餌として利用していると考えられた。